

『理科の教育』1956年3月（日本理科教育学会）

最近におけるカリキュラムの 傾向と問題



矢 口 新

観念カリキュラム

戦後、各学校でのカリキュラムづくりというのが実に盛んになった。これは一面において大変よいことである。学習というものは、実際にある村のある生徒が活動するのであって、その学習活動をどうするかは、その生徒がどういう生徒であるか、どういう環境で生活して具体的にはどれだけの学習ができるかということを知っている教師が計画する以外には手はないのである。だからカリキュラムは文部省や教育委員会で作るものでない。その意味で各学校でのカリキュラムづくりがはやったというのは、よいことである。今までやらなかったのがおかしいことであったので、はやったというのは、熱にうかされたようにそれにとりくんだので、そう見えたのである。最近はややく落ちついてきて、はやらなくなったように見えるが、地道になってきているともいえよう。もっとも熱にうかされた人たちの中には、もうすっかりカリキュラムということばを忘れたかのような顔をしている人もいる。

そこに問題があるのではないだろうか。というのは、カリキュラムづくりということが、そう簡単にはやったり、すたったり、また熱にうかされたり、忘れはてたりするものとし、一般に受けとられていたということが問題だということなのである。そこには、カリキュラムづくりについておそろしくピントのはずれた考え方があるのではないか。

多くの学校にりっぱな、分厚な東京都の電話帳のごときカリキュラム、〇〇プランというのできているが、多くの場合、それがほこりをかぶって、書棚にのっているだけであり、見たこともない先生が多くいたり、見てもよくわからないという先生がいたりする。学習の実際の場面をみると、そのカリキュラムと称するものとは以てもいつかぬようになっていく。私のよみ方がわるいのかしらないが、どう読んでも今行われている学習はプランとは関係がないように思われるという場合が多いのである。私はその場合、この学校にカリキュラムがないなどは考えない。現に行われている学習がカリキュラムだと思う。そうすると、この印刷されたものは何かということになる。然し私はそのことは、もう問題にしない。それは無いものだと思うことが一番事態がはっきりするのである。

ところでこう考えると、現にあるところの、その実際に行われている学習の系列であるカリキュラムであるが、それがいかにも貧弱につくられているのである。あれほどカリキュラム作りがあったにかかわらず、一向その現実の場のカリキュラムはりっぱにつくられていないではないかという気がする。現実のカリキュラムは、ただ理科の教科書を読んで、説明していくというふうにしつつつくられていないのである。観察や実験の設備や準備も一向戦後10年間つくられてきたように思えない。まったくその場の思いつきのものか、昔のままで一向改善されつくり直されていない

設備かである。先生と生徒の考えていくすじみちや話合っていくすじみちも、一向洗練されていない。その場の出たとこ勝負であるという感がする。もちろん相手が人間だから先生のやり方もその場その場できめられるのだが、その準備がいかに足りないのである。

だから、カリキュラムづくりは今まで行われてはいなかったと断定せざるを得ないのである。すべての学校がそうだとはいわない。中には大した学校もあり、りっぱな授業をみせてくれる先生もいる。が概してみると、そうでない。大部分は20年昔のカリキュラムである。

戦後10年のカリキュラムの傾向を考える前にこういう最も根本的な反省が行われる必要があるのではないか。やれ生活カリキュラム、やれ単元学習、やれ問題解決といっても、それは観念カリキュラムの上の話でしかない。机の上のプランでしかない。そうなればよいという夢でしかない。現実にかえると、とたんに昔のままのカリキュラムになる。これでは、どんな理論が語られようとそれは単なるお題目でしかない。そういうカリキュラム研究や、論議や、カリキュラムづくりをやめなくてはいけない。

一体カリキュラムをつくるということが、考えてみればおかしいことなのである。白紙に地図をかくように、つくるものでないのである。つくるより前に現に今行われているものがあるのであって、それは先生や生徒の行動を決定している。環境もちゃんと具体的なものがある。それをきりかえていくことである。これについてはよいたとえがある。

東京の新宿駅が今プラットフォームの拡張をやっている。ホームの幅をひろげて、線路を移動していくのである。しかし、ひろげる、移動するといってもそれは毎日使用しているホームであり線路である。だからよほどうまくやらねばならぬ。平常通り電車をうごかしながら、いつの間にか新しい幅の広いホームができ、それにしがって、新しい線路を電車が走るようにしなければならぬ。

この切かえの順序は実に巧みなものである。これはなかなかことばで説明できない。しかしそれは、実に細かく計画され、段階をふんで行われている。そうして、いつの間にやら、見ちがえるようなりっぱなホームを使って乗降していることに気がつく。

カリキュラムの改造もこういうように考え行われなければならぬ。つまりでき上がった形がただ机上で考えられているだけでは、カリキュラムでもなんでもない。それがカリキュラムになるためには、つまりその設計図のように現実をつくりかえるには、どういう順序で、現実のどこにどういように手を入れていって、だんだん切りかえるかという計画を立てられなければならない。設備をどうするか、どういう教材を準備するか、その順序はどこからはじめてどうするか、などということが一つ一つ計画されなければカリキュラムは改造されない。

今までのカリキュラムづくりや、カリキュラム研究では、そういうことは考えられていないし実践されていない。これが、カリキュラム形態論はやり、観念カリキュラムがたくさんつくられたにもかかわらず、現実にカリキュラムはかわらないことの理由なのである。これはカリキュラムを問題にすることの深さの問題である。教師の頭の中でしか考えられないか、学習の現場で考えられるかということである。教師の頭の中でいくら夢を描いてもはじまらない。そういう観念カリキュラム論の時代は一刻も早く克服しなければならぬ。カリキュラムの傾向をいくら論じても、そのカリキュラムそのものが宙にういているのでは話にならない。戦後のカリキュラムの傾向の最も問題とすべき点である。

生活学習

戦後カリキュラムについては、生活とか経験とか、問題解決とか、さまざまな要求が一どきに出た。昔の教育はいわゆる教科書講読主義であるといわれ、そういう構造のカリキュラムを改編しよ

うということがそういう事態を生んだといっ
てよいであろう。生活理科などということ
は必ずしも戦後にだけ言われたことでは
ないが、昔流の教育を批判し、新しい教
育をつくらうとする意欲は戦後にとくに
著しかったといえよう。

もちろんカリキュラムについて、こうい
う問題がやかましくなったのは、単に理
科ばかりではない。否むしろ理科は後か
らついていったのであって、カリキュラ
ム運動ともいべき戦後のブーム状態は、
社会科を中心にしてまきおこったのであ
る。そこから生活とか、問題解決とか、
経験とかも、特殊な様相をもって考えら
れているのである。そこから理科のカリ
キュラムについて根本的な突込みがな
されなかったという傾向があるのであ
らうか。その辺のことを検討してみたい。

いわゆる教科書講読主義というものの
アンチテーゼとして生れたところのものは、
具体的には何であったろうか。特に理科
の場合についてはどういうものであ
ったか。教科書教育といっても純粋に
教科書を読んでいくだけの学習のみが
批判されているのではない。もちろん
そういうものは純粹型といわべきもので
あろうが、そういうのは少ないのであ
って、多くは観察や実験を多少は行
っているものとみてよい。しかしその
観察や実験が、書かれた概念をおぼ
えていくという学習形態の中に位置づ
けられているのである。概念をおぼ
えるための観察や実験というのは、本
当に見ていることにはならない。そも
そも見るというのは見る対象について、
何かを見とってくるのである。一つの
対象については一つのことだけが見ら
れるのではなく、さまざまなことを見
とることができるのである。一つの対
象をどういうものとして見るかは見
る者の観点によるのである。観点が
進歩し、充実していくのが科学の進
歩である。石炭が燃える石としか見
られない段階から、観点の進歩によ
って、さまざまなものを含んだもの
として見るできるようになったのであ
る。そこには科学がある。この観
点が、まったく固定した至上命令
のごときものとして、外から与えら
れては、

物を見ることにならない。この観
点が、一つの観点として、自分で自
覚されたものであって、はじめて本
当に見たことになるのである。これ
が問題をもってみるとか、経験さ
せることが必要とかわれるゆえ
んなのである。

概念をおぼえるのでなく、概念を
自得させることが大切なのである。
この点は自然現象に対しても、
社会現象に対しても同様である。
概念を自得させるにはどうする
か。人はだれも、子どももおとな
も、あるものを見ようとしたとき
には、その時における観点をも
っている。それは、はじめは体系的
、組織的になっていない。習慣的
にただみているのである。自覚
されていない。それはあたかも、
レヴィ・ブルジュールが言うよ
うに、野蛮人は驚くほど合理的
に行動するが、それを説明する
ことはできないということとお
なじである。

科学はその観点を合理的に体系的
に自覚したものである。理科の学
習で最も大切なことは、だから、
その自分の習慣的行動、習慣的
観点のくみかえをすることである。
断片的概念が与えられても、その
くみかえにはならない。自らが
概念を自得する過程の中に、合
理的な世界像ができるのである。
これが問題をもって、自ら対象
にぶつかりつつ学習していくこと
なのである。

生活ということが言われるのも、
実はおなじことなのである。自分
が今もっている観点は、今までの
環境においてつくられたものであり、
その環境がどうみられているか
ということ、その環境を見る観
点をどうもっているかということ
と同じことである。見方をか
えるというのは、その環境が
ちがった姿においてみられてい
くことなのである。同じ世界が、
まるでちがった相をもってあら
われてくる。そこにちがった見
方が身についたのである。理科
の学習はそういうように、子ども
の通俗的世界像を、科学的世界
像につくりかえることなのであ
る。あたかも動物の変態のごと
く、おなじものがまるで異な
った構造をもってあらわれる
のである。自分の世界をつくり
かえることが理科の学習であり、
それが自分の目がかわ

ったことなのである。生活とは、そういう学習の地盤であり、対象であり、世界像を生み出す根源なのである。

こう考えると、戦後言われたことは、大変重要な問題を含んでいるのである。人間形成の根本問題にふれることなのである。ところが、一般に理解されているところではきわめて皮相な理解でしかない。

したがって生活というのがまたきわめて通俗的にしか考えられていない。生活というのは、今もっている世界像のことなのである。しかし、そうは一般には考えられない。生活の問題は、世俗的な問題なのである。そうして理科は世俗の生活的問題を処理するためのものだと考えられる。たとえば食物をくさらせないようにするために、冷蔵庫の使用法を教えたり、かんづめにすることを教えたりすることが理科だと考えられている。これこそ新しい信仰を与える教育でしかないではないか。大切なのは原理なのである。その原理を自ら発見することなのである。ところがそれはすっかり忘れられていて、生活の問題をとりあつかったという満足で一ぱいになっている。早わかり的生活技術教育であろう。書物で新書版という手軽なものはやるのとおなじ現象である。これでは正しい自然科学的世界像をもった人を育てることはできないではないか。

カリキュラムの改造

すこし話が現におちすぎたようである。しかし私は理科の教育が、これからの日本人の物の考え方、見方をつくる上に最も大切なものであると思うから、その根本的な考え方を追究してみたのである。戦後のカリキュラムの運動が、きわめてよいものをねらっているが、現実において、そういう方向にっていないところに問題があることを明らかにしてみたのである。そしてその根本の一つは観念カリキュラム論により、その二は自然科学的考え方に対する理解の浅さに問題があることを見たのである。

これまで述べたことは、いずれもカリキュラム自体のことでないように考えるかもしれない。なるほどこれまで問題にされたカリキュラム論は主として形態論であり、やれ生活カリキュラム、やれ関連カリキュラム、やれコア・カリキュラム、などということであった。ところが考えようによっては、そんなことは枝葉末節ではないか、要は現実の学習が一つ一つ正しく行われることである。それはカリキュラムという点からいうと、先の方のこと、末のことかもしれない。まず全体の体系があって、それから学習が行われる。その全体の体系がカリキュラムというもので、それが根本であるといった考え方が、カリキュラム論の筋道である。しかし、それは理論としてまことにもっともであるけれども、現実のカリキュラムを改造していく点から言うと、さか立ちになるおそれがある。全体的なこと、印象的なことは、いくら論じても、現実のカリキュラム改造にはならないのである。

現実にもわれわれがもっているカリキュラムは、単に考え方の問題でなく、行動の形態であり、習慣なのである。一つ一つの具体の所までちゃんとそういう習慣ができているのである。そしてでき上っているものがいわゆる教科書学習であり、教科書講読カリキュラムなのである。これを改めるには、一つ一つ具体の場面で行動そのものを切りかえていかななくてはならぬのである。それはあたかも、理科の学習が一つ一つの問題について世界像を切りかえて、そのつみあげによって、自然科学的世界像をつくりあげるように、ちょうどそのまま理科のカリキュラムの切りかえも、一つ一つの問題について切りかえていき、その積みあげをしていかななくてはならぬのである。

こういう問題として、カリキュラムの改造問題においてこなくては、カリキュラム改造の新しい気運はこのまましぼんでしまうのではないか。つまり、それはカリキュラムの要素である単元の問題から出発することである。しかし、単元論をやれなどということではない。その現実的な改造を

考えるべきである。ということは、つまり、その単元の所で、子供の世界像がいかなるものか、それをいかに切りかえるのか、その方向はどうなのか、そのための経験とは具体的に何であるか。つまり教材は何か。その場合の科学的思考はどうあるべきか、などということが、考えられなければならない。

そういうものの積みあげが、カリキュラム改造になっていくのである。ローマは一朝にしてならずというが、カリキュラム改造はまさにそういうものであって、今まで数十百年の伝統をもつものを、わずかの期間に改造しようとしてもできないことである。カリキュラムづくりをやる学校が1週間とか1か月ぐらいで電話帳カリキュラムをつくったりするのをみると驚くばかりである。カリキュラムとはそんなものではない。少なくとも5年10年という計画で、計画的に行わなければならないのである。そういう点が戦後はまだ欠けていたのである。個人の、あるいは個々の学校の思いつきのスタンドプレーのごときものが多かったのであって、本当のカリキュラム改造を考えた人

は少なかったようである。

こう考えてみると、カリキュラム改造はもっとちがった体制がとられなくてはならぬことになる。紙数がないから簡単に述べるが、私はカリキュラムの改造は、地域社会の共同体制によって行われるべきだと思っている。各学校がいくつかの単元を分担して、具体的に実践し、相互にひれきし合って多くの教員の批判によって、しだいに具体的な単元計画としてつくりあげていく。もちろん研究といっても具体的に実践しながら研究するのであるから、施設・設備や教材のことも考え、実際にととのえていくのである。そうして、一つの学校で行われたよい例は他の学校もそれを取り入れる。他の学校もそれぞれ研究して、ほかの学校にその結果をひれきする。このような分業が行われ、共同されることが最もよいことだと思う。こうして5年10年をかけることが、本当のカリキュラムを生み出すもとである。戦後10年して、今何が生み出されたか、大いに考えてみる必要がある。

(国立教育研究所教育内容研究室長)